



み母はマリア み子はイエスキリスト

クリスマスメッセージ

共に「神の物語」を描こう



チャブレン 市原 信太郎



今年、礼拝で朗読された聖書箇所を選び直しました。この大きな理由は、「聖書の朗読そのものからクリスマスメッセージを聴き取る」ということをはっきりとさせ、旧約聖書から続く一連の物語として、クリスマスメッセージの出来事があるというこの意味を共に考えたいと思ったからです。旧約聖書の預言者たちは、いろいろな形でメシアと呼ばれる救い主がやがて来るという神の計画を人々に伝えました。そして、その計画の実現がクリスマスなのです。

出来事を通して素晴らしいことが起きたということを知って読んでいくわけです。ある意味、ヨセフやマリアが知り得なかったこと、少なくともこのクリスマスメッセージの時点では知るよしもなかったことをわかっていながらクリスマスメッセージを見ることのできる、という特権的な立場にいると言ってもよいでしょう。

しかし、そのような観察者としての視線ではなく、当事者としてこの物語の中に身を置いてみた時、クリスマスメッセージは単なるお話ではなく、一人一人がそれぞれの人生をかけて、その時その場所で一生懸命に生きたことが連なった結果として描かれる、「神の物語」であることを悟ることができるでしょう。さて、二千年前の物語の中に当事者として身を置く、ということは何を意味するのでしょうか。

東日本大震災から三年九カ月あまりが過ぎました。その年、わたしがこのクリスマスメッセージとして語ったテーマは、「サバイバズ・ギルト」でした。震災や津波で犠牲になった方々がたくさんおられることを知りつつもなお、「ここで自分が生きていくこと、罪悪感としてではなく、一人ひとりそれぞれに与えられたかけがえのない命として大切にしたい」ということを、誰よりも自分

分に言い聞かせるつもりでお話したことをはっきりと覚えていて、それから三年が経過した今、わたしたちはどのような状況で生きていくのでしょうか。あの時点ではまだ知る由もなかった、三年後の日本という場所にわたしたちは生きています。この三年間を振り返って見る時、わたしたちは何を感ずるのでしょうか。そこにはどんな物語が描かれてきたのでしょうか。

東北地方にお住まいの方から、こんな話を聞いたことがあります。「復興」って言うけど、「復興」なんかしてもらっちゃ困る。元に戻っちゃ困るんだ。わたしは、あの二〇一一年三月十一日を機に、わたしたちが新たな物語を描き始めるという決意を、クリスマスから「神の物語」を聴き取ることはできないのではないかと思えます。元通りにする、という視点だけでこの三年間を考えると、この時代に「神の物語」を聴き取る努力を怠り、わたしたちが知りうる範囲、自分たちの手の届く範囲に未来を押しとどめることのできるの間の安心を得たい、という、人間の弱さゆえの願望の現れに他ならないのではないのでしょうか。

住まいを失った方々がきちんとした住宅を再建し、普通の生活をしたくないという希望はもろくなえられなければなりません。しかし、それは真の意味での「復興」という大きな物語の中の一部であるということに忘れてはなりません。これからずっと続く未来に向けた大きな物語をどう描くのか。エネルギーの問題、経済の問題、安全性を確保するよりも優先できるかという問題、これらを単に元に戻してしまつたら、この震災から何を汲み取ったのかという問い、わたしたちは未来の人々から問われることになるでしょう。

大きなことを言うようですが、この震災が起こった時の本校のチャブレンはわたしたちであるという、ある種の歴史的責任をずっと心の中に思いつつ、この学校で生活してきたつもりです。今、君たちと同じです。今の時、日本に生活する本校の生徒であるという事実に対し、君たちは歴史的責任を負っているのです。君たちは、一人ひとりが先に見える中で一生懸命に生きた結果として描き出された「神の物語」であるクリスマスメッセージを、この礼拝の中で聴きました。その君たちは、自分たちの物語を一生懸命将来に向けて描き続けなければなりません。

それは、何か大きなことをしなければならぬという意味ではありません。自分の場所、自分に与えられた状況の中で、直面する事柄に誠実に取り組むということの積み重ねでしかありません。

そしてそれは、君一人の物語ではありません。それらは神様の手によって束ねられ、一つの大きな「神の物語」になっていくのです。そこに、わたしたちの希望があるのです。

感謝

「高」第三七回府中多摩川マラソン大会 高一 高橋 暉



「暉は陸上部に勝てるよ。練習早かったし。」 「暉、気合入ってるな。ファイト。」 と多くの人に言われている中、私は少し鼻が高くなっていた。実際体力にも自信があるし、マラソン大会の練習でもいつも上位にいた。二十キロは走ったことがなかった。未知の世界だったが必ず走り切り陸上部に続いてやる。と思ってスタートラインに立った。いざスタートがスタートしてペースも安定していき二十キロの時点で陸上部に続き上位で全体でも恐らく四十位前後だった。このままあと十キロ走ってゴールするぞ。」 と思い走り出した。だが十五キロ地点で私の体に異変が起きた。持久力ではまだ余裕だったが、二十キロという長い距離に足がつかない。歩いてしまった。体調が悪く、歩くのが本当に辛かった。もしかしたら人生の中で一番過酷な三キロだった。

と思う。順位は上位だったにも拘わらず次々と抜かされてつけない屈辱感があった。途中でリタイアしようかと思いつつも何度か走り続け、膝に手を付いた。だがそんな私を救ってくれたのは仲間であった。みんな自分自身が走り切るのに頭がいっぱいはずなのに、すれ違う時、私を抜かしていく時、本当にみんなが、「頑張れ！みんながゴールしよう！」

と激励の声をかけてくれた。中には話したことがない人や一般の方も声をかけてくれた。私はその涙を流しそうになったが、必ずゴールしてみんなが喜ぼうと思ふ。懸命に走り足をつりながらも無事ゴールした順位は百位近く落ちたが、きつかった以上に仲間との触れ合い、言葉の重要性に気付くことができた。私は立教池袋高校二年の心の優しさに改めて強い感謝の気持ちを感じた。

中学一年便り

待ちに待っていた

この時期は、バレンタインの日に次いで落ち着かないものだった。クリスマスや年末年始、それぞれの家では特別な行事を今年も計画しているのではないだろうか。私も中学生のときにはプレゼントやお年玉をもらい、スキーに行ったり楽しんでいた(受験の時は塾だった)。その楽しい行事に近づくことに浮かれていた。親族全員が集まる行事があるのだが、従兄弟の5人全員が男ということもあり、みな似たような顔をしていた。華がない。最近はその従兄弟に新たな家族ができ、自分がお年玉をあげる側になっていることに、この時期に待っていた行事もだいぶ立場が変わって落ち着いてきてしまった。

(伊藤 俊)

中学二年便り

「違う」ことへのまなざし

「そうなんだ」という驚きから、繋がる世界がある。始まりはいつも「知ること」から。地図の上でしか見たことのない国、教科書に載っている国など、ニュースで話題になる国など、遠く離れた国の情報は、メディアを通じて方法でしか日本から知ることが出来ない。しかし勇気を出し一歩足を外に向けると、生きた情報である「事実」を自らの目で見ることが出来る。大学の一年の夏、私は長期休暇を利用してイギリスのオックスフォードにある語学学校に通った。そこはまるで世界の縮図ではないかというほど様々な国から学生が集まっていた。当初私は、異なる文化、異なる言語、異なる考えを持つ人々と完全に分かりあうことは難しいのではないかと感じていた。それは、私が彼らと自分は「違う」のだと無意識に思っていた。けれど無意識に思っていたかのようなかもしねるうちに、彼らとの共通点や新たな発見があり、「違うから分かり合えない」のではなく「違うからこそ知るべきなのだ」ということに気付いた。会話を重ねることで、彼らと私が「違う」という感覚は自然となくなっていく。私たちは今、日本で学び、同じ教室で生活している。同じ空間にいる仲間を自分と同じような人ではなく、無意識に思ってしまうこともあるだろう。けれども考えてほしい。同じ言語を話している、考え方や性格はみな違う」ということを、自分とは異なる考え方を持つ人と会話を重ね、お互いに相手を深く知り、理解し合えていけたらより良い学校生活を送ることが出来るのではないだろうか。

(小林 明音)

中学三年便り

ごめんなさい

「ごめんなさい」って、きちんと言えますか? 最近この「ごめんなさい」を言えない人が多くなっている。非礼を詫言する際に用いる言葉なのではなさそうに聞こえるが、この言葉を耳にする機会が減ったように感じます。特に、素直なごめんなさいを聞く機会が本当に少なくなりました。なぜなのでしょう。何かコトが起きます。状況を判断すると非があるのは明らか。当然指導が入ります。そのとき発せられる「いや、違うんです」の第一声。その時思っている「ああ、何もわかってないなあ。言い訳するよりも、まずやるべきことがあるんじゃないですか?と。あとから「反省します」と言われても、正直シラケます。「本当に申し訳ないと思つてます」とさらけ出さず、ならば最初はその気持ちで正直に伝えるべきなのではないのですか? 思っている相手には伝わらなければ負けています。私はいつも負けはあります。誰にだって負けはあります。しかし、それを素直に振り返り、しっかりと反省しなければ前に進めません。嘘をついてごまかそうなんでもつとごまかして生きていくことになりません。

(藤本 勉)

高校一年便り

春に備えよう

駅伝シーズンに入り、わが校も中学・高校ともに大会があった。中学校は選手が揃わず苦戦したが、高校は百二十校が参加の中、強豪校と競い合い一区で六位と健闘し、充分試合を楽しませてくれた。七区の最終区のゴールでは結局二十二位で終わったが、一年生中心のチームなので来年度以降が期待される。十一月末日に関東の中学駅伝大会が東京の八王子で行われ、役員として大会を手伝った。競技場や沿道の周りの木々が赤や黄色に紅葉し、実に綺麗な景色であった。わざわざ日光のいろは坂に行かなくても都内でも素晴らしい紅葉を見ることが出来るのだと感心した。木々の葉が全て落ち木肌だけが残り、これから向える暗く寒い期間、体を動かすにしても、億劫で気持ちも沈みがちになる。しかし、この期間が大切な時になるのだ。木々は土の中で根をしっかりと張り、養分を蓄え、春を待つ。入学式から九ヶ月を過ぎ、高校生らしくなってきた諸君だが、来年度はいよいよ、学友会活動や学校行事などたくさんある。授業になると冬眠しているかのような者もいるが、しっかりと目を開いてもらいたい。この厳しい冬の間に、木々のようにじっくりと力を蓄えて来るべき春には、ひとまわり大きな幹と育ち、ぱつと大輪の花が咲くような活躍して欲しいと願っている。

(岸 博克)

高校二年便り

人を楽しませるということ

渋谷の街が仮装した人々で埋まったあのハロウィンの日、ラジオのDJがワールドカップの時の喧騒と同質だと語るのを聞き、人は同じようなことを感じるのだな、と思う。(また、ある世代以上の人は、ハロウィンと聞くと、留学中に銃撃された服部君のことを考える)。

思い出すのは、横浜国際総合競技場で日本対ロシアの試合が行われたワールドカップの日、永遠とも思えるようなブルーの人の波が信号を全く気にせず、にぞろぞろ歩いてくる光景だ。

今日はハロウィンなのだから、何をやってもいいのだという治外法権的な集団心理に対し、祭りのなだらかな野暮なことは言うまいと思いつつ、決定的に違うのは、本来、仮装とは、人を楽しませるものだったのではないかと、思うことだ。

笑いの基本ではあるものの、仮装やかぶりものは本人が思っているほど面白くないことが多い。それでも他者を楽しませるために練られたものとは自分を楽しませるだけのものには大きな開きがある。

体育祭やR.I.F.で高校二年生は「つくる」側、つまり楽しませる側に立って奮闘した。そして自分が楽しむのではなく、人を楽しませるということの難しさを体験したのではないかとと思う。そのことを知ることができたのなら、それはとても幸せなことだ。

「R.I.F.」において「有志お笑い」を見てみたい気もするが、怖くもある。この怖さが必要なのではないかと思う。

(高橋 整)

高校三年便り

武器

皆さんが立教池袋の学び舎で過ごす日々も、残りわずかとなりました。同時に、長く生活を共にした仲間と別れて各々が選んだ世界へと羽ばたいていく日が、刻々と近づいています。新たな道を前にして、どのような心持ちでいるのでしょうか。私も高校生の時分をこの立教池袋の学び舎で過ごし、立教大学へと進学しました。卒業論文や最後の期末テストが終わる、進学に向けた準備を進める間の何とも言えないそわそわとした気持ち。八年が経った今でもよく憶えています。しかし当時は、まさか自分が大学を卒業した後には美術大学に入り、さらには美術教師という立場で再び母校に戻ってくるなどとは、夢にも思っていませんでした。

皆さんはこれまでの学生生活での体験と学びを武器に、身ひとつで新たな道を進んでいくことになりま。そして、これからの日々の中で得る経験や身に着ける知識、築き上げる信頼関係は、今後また新たな世界へと踏み出すときの大きな武器となるはず。中には、私のようにまったく予想もしていなかった道が拓ける人もいるでしょう。そんな選択に迫られたときにも、それまで身に着けた武器が背中を押してくれることと、思います。

「人生何が起るか分からない」なんて言葉がありますが、「何かを起こす」のは自分自身の役目です。慎重さは大事、でも臆病さは邪魔。ぜひ様々なことに積極的にチャレンジして、得たものすべてを皆さんの武器としてください。

(中仙道 優真)

一茶まつり全国小学生俳句大会
学校賞(最優秀)受賞

二茶まつり全国小中学生俳句大会(第53回)で、本校が最優秀校に贈られる「学校賞」を受賞し、11月23日授賞式が炎天寺で行われました。

高校文芸部 神奈川大学全国高校生俳句大賞 最優秀賞受賞

神奈川大学全国高校生俳句大賞において細淵一史君(3年)が最優秀賞を受賞しました。

今日の聖句

「主はアブラムに言われた。「あなたは生まれ故郷、父の家を離れて、わたしが行きなさい。」アブラムは、主の言葉に従って旅立った。」

(創世記12:1, 4a)

のちにアブラハムという名前を神から頂くイスラエルの父アブラムの旅立ちには、このように突然の神からの呼びかけであった。理由も行き先も分からぬまま、ただ主の言葉だけを信じて彼は旅立つ。我々が歴史の中で生きる、ということもまさにこのようなのだろう。一人一人が歩む人生の道筋は神のみぞ知る。だが、それらが合わさったところに神は一つの物語を立ててくださる。未知への信頼の旅路を、来年も一緒に歩いていこう。